伊平屋・伊是名両島における聖地名と集落の立地に関する考察

慶應義塾普通部教諭　那波克哉

沖縄県伊平屋島と伊是名島をフィールドとし、『琉球国由来記』に記載された聖地の GIS データ化を行う。特に「コシアテ森」「アフリ森」の位置関係について整理すると各集落の移動や信仰の意識が見えてくる。この実践を通して様々なタブレット端末やアプリの比較検討も行い、教科を横断した教育プログラムへの応用方法を模索したい。

『琉球国由来記』所載の聖地名の GIS データ化

1713 年に編纂された『琉球国由来記』は伊波普猷が「琉球の延喜式とも云ふべきものである。」（琉球史料叢書　第二巻　「解説」S47.4 東京美術）としているように当時の貴重な情報が収められているがまだまだ研究の蓄積は多くない。

そのような地域をあえて選ぶことにより、答えの予定された学びではなく、探求する深い学びにつながる教育プログラムに繋げられないかと考えている。

今年度の調査では伊平屋・伊是名両島の聖地である御嶽に注目し、併記されている神名（森名）に信仰の意識を探った。（伊平屋島伊是名島合わせて 22 箇所）

これを現在伝わっている拝所と照らし合わせ、文献や聞き取りから GIS データにしたものが左図である。由来記に記載のある「ヲッ川嶽」のみ、比定地が判然としない。

多く見られるのはコシアテ森（４箇所）とアフリ森（４箇所）の名であり、次頁ではさらに詳細な地図から集落との位置関係を検討したい。

使用した端末とアプリ (ソフトウェア)

Windows10 タブレット（富士通 q335）/ QGIS
iPad mini2 (ios) / FieldAccess2 , GMapTools

メインの地図編集は QGIS で行った。しかし Windows10 には現在地の表示の不自由さがあり、フィールドワークでの使い勝手が悪い。そこで屋外では主に ios 端末を使用した。

FieldAccess2 はメインのデータ処理（ウェイポイントの登録）に使用した。ポリゴンの表示はできるが作成ができないのが唯一の欠点であった。GPS ログの取得結果は良好で、またタイルマップとの重ね合わせもできるので、屋外での閲覧には最適であった。

GMapTools はポリゴンの作成ができるのが強み。Google のアカウント内でマイマップを作っておけば読み込めるので大人数でマイマップを共有してシェアするという使い方ならできそうであった。

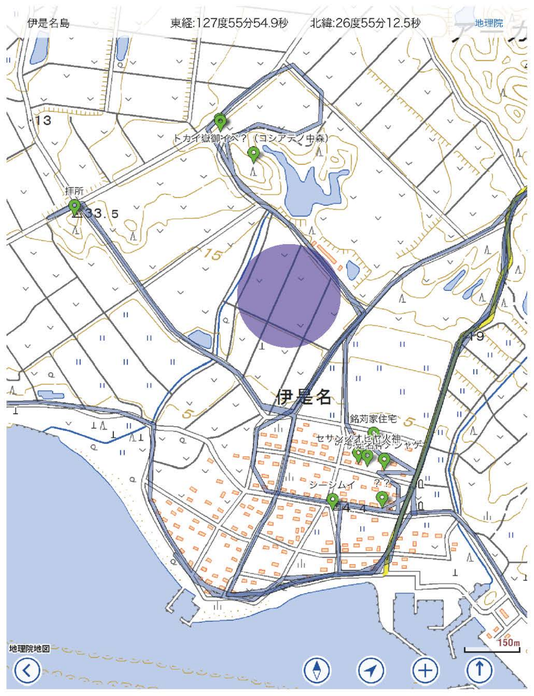

図１　伊是名村伊是名

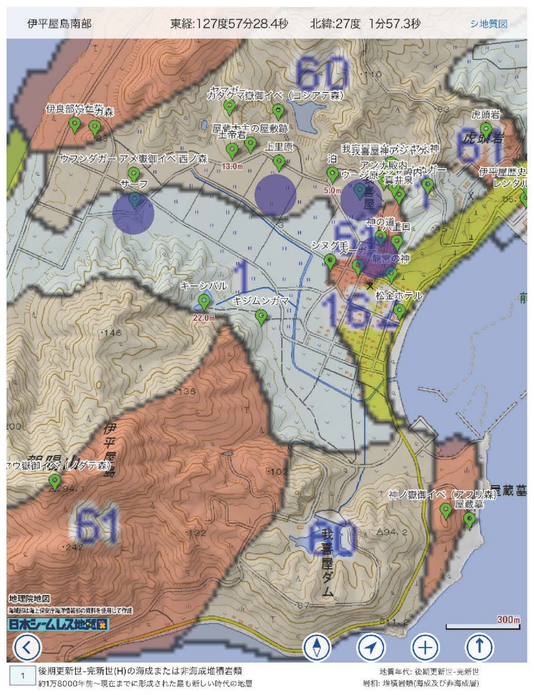

図２　伊平屋村我喜屋と地質図

図３　伊平屋村我喜屋

コシアテ森

集落を守る神の坐す森を意味し、その存在の安心感のもとに集落が発展していく、この考え方を今回の聞き取りでも確認できた。しかし、伊是名村伊是名や伊平屋村我喜屋でのコシアテ森は現在の集落からは離れている。これは集落が移動している為であって、集落の移動伝承を追うフィールドワークにタブレット端末を使った現地での調査は有用であった。

伊是名においては青で示した位置から現在の位置に集落が移動しており、「コシアテノ中森」が過去集落の背後の守りとなっていたことが見えてくる。

左の２つの地図は前出のアプリ「FieldAccess2」より書き出したものであり、図１の水色のラインは実際にログを取った軌跡である。ログの軌跡はかなり正確であった。

伊平屋村我喜屋のコシアテ森も現在の集落とは離れている。ここは集落の移動が少なくとも３度あったという伝承があり、図２で青く示した一番西のサーフ及びアメ嶽御イベ（西ノ森）から徐々に東へ寄っている。現在までカタクマ御嶽（コシアテ森）の比定地として残っている片隈神社は２番目の集落の守りであったと考えられる。

また、様々なタイルマップと重ね合わせられる「FieldAccess2」の面白さとして、ここでは日本シームレス地質図と重ねると、港を意味する「泊」やウツボを獲っていたとされる「ウージ原」という海を想起させる伝承地が「１」（後期更新世ー完新世の最も新しい堆積岩類の地層）の近くに存在することが見えてくる。比定地不明の場所を探す一助になる可能性があり、屋外でタブレットを使いながら実感をもってその恩恵に預かった。

アフリ森

もう一つ伊平屋伊是名両島でたびたび見られる神名（森名）として「アフリ森」がある。図３における我喜屋のアフリ森は青く示した部分である。この地図は QGIS で書き出した。一般的には「天降り」という字が連想されるが我喜屋での聞き取りでは出征の際に祈った例があるとのことで、旅の安全を祈願する意味合いが強いといえる。野甫島ではアフリ嶽御イベ（アフリ森）の神が泳いで辿り着いたとの伝承があるので、神が天降る森というより神が寄る森という面が強いか。　伊是名の川嶽御イベ（アフリ森）も海岸部から目立つ岩山であった。伊平屋村田名のヲッ川嶽（アフリ森）が判然としないが、上記の理由から田名の海沿いを中心にさらに検討する必要がある。

今後の課題

現地でもデータの入力方法は安定してきたが、そのデータを即座にシェアする方法については今後も検討していきたい。また、GMapTools 以外でポリゴンを簡単に綺麗に入力する方法がいまのところ見当たらない。Windows10 や QGIS でそのままフィールドワークするには、移動の多い調査は向かない。一つの集落内でじっくりデータを作り込みながら歩く場合は可能だと考えている。

教育プログラムへの応用に関しては、伝承地が一定の範囲内で多く存在することと文献での下準備と現地での聞き取りと両方のバランスが取れていることが重要であると再認識しているところである。

なお本研究は平成 28 年度慶應義塾学事振興資金（共同研究）「歴史民俗調査成果の GIS データ化と教育へのフィードバックに関する研究」（研究代表者：高橋傑）の成果の一部である。